



Title	ヨーロッパの「老い」：スーパーマーケットの虫眼鏡：イギリス編
Author(s)	堀井, 富士子
Citation	大阪公衆衛生. 1986, 50, p. 9-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83950
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヨーロッパの「老い」

— スーパーマーケットの虫眼鏡 —

～イギリス編～



大阪府藤井寺保健所長 堀井富士子

イギリスは1930年に高齢化社会に突入し、55年を経過した。

65歳以上人口割合は1980年でほぼ15%、現在世界第5位の高率国で、いまだ上昇中。

第一次産業は年々減少し、管理的職業指向、第三次産業がどんどん増加中である。しかし失業率は13%と高く、高校卒業して3人に1人しか就職出来ない。仕方ないので大学に入る。大学をでても就職がないというわけで若者の間に麻薬がはびこるようなことになった。

高齢化で増加する要援護老人のみならず、精神障害、麻薬・アルコール中毒、小児虐待（毎日1人が死ぬ）などの社会病が増加の一途をたどっている。

イギリスの行革

1946年国民保健サービス法National Health Service Act が国会を通過し、1948年から国民医療は国営化され、国家は国民の健康を守るために、保健サービスに責任をもつことになった。

それによってすべての国民は家庭、地域および病院において看護・治療のみならず、母子保健、薬剤、装具など予防からリハビリテーションにいたるまでのサービスを無料（ただし処方箋、義歯、眼鏡は一部受益者負担）で受けられることになったのである。また同時に地方自治体組織の改革で、上下水道、塵芥

に関する環境衛生の諸事業にも保健医療サービスとの連けいが図られ、広くイギリス国内に定着した。

その後1974年、より包括的なサービス供給を目的に病院、家庭医、地方自治体のそれぞれのサービスを統合し再編成した。

しかし、時代の変遷はより激しくなり、今またN.H.S. 機構は3段階から2段階に行政改革されたのである。

そんなことで、今回公式訪問予定の東部地方保健当局は、局長もとびまわっている状況で、ジョン・エドワード局次長が我々のホテルまで出向いてこられて「N.H.S.の現状について」と題して説明された。

「成人・老人対策と慢性疾患の増加で医療費はのびる一方である。今こそ地区の保健活動費をふやし、疾病予防とリハビリテーションに力を入れなければならない。そのため40年の歴史を世界に誇ってきたN.H.S.に大きな改革をしなければならなかった。役所の組織をへらすことにより、その人件費等予算を医療費の赤字、高度化する病院設備、老人対策費へまわすのである。

今、病人は入院するのに3ヵ月（眼科は6ヵ月）待たされている。そこで金持ち用の自費の私的クリニックや病院がふえだし、勤務医は院内にプライベートベッドを持ったりー。

このままではN.H.S.はつぶれてしまう。保健・福祉・医療の制度は常に時代の状況を読

み、柔軟に適切な制度で対応をしなければいけない。したがって今我々は大改革にとりくんでいる。」と話された。

この改革で東京都庁にあたる役所がなくなったわけで、通訳氏の言葉によると「あそこはあまり我々からみても仕事をしている様に見えなかった。スローで不親切で印を一つもらうのに時間がかかって困った。職員は年140日も有給休暇があり、働いていなかった。」と我々を日本の公務員と知ってか知らずか英国の公務員批判を聞かされた。

高齢化社会、医療の高度化と不況の中でゆれる福祉国家英国の置かれている状況の厳しさをつくづく知った。

社会病理とソーシャルワーカー

今一人の年金受給者に対し2.3人の拠出者がいるが、2035年(50年後)は1.6人に減少するということを国民に充分知らせ、社会保障制度の抜本的改革を検討している。

老人対策として長い歴史の中で在宅ケア、給食サービスがすべて民間篤志団体の活動で実施されている。ボランティア活動は国民にとって当然の義務として、成人4人に1人はなんらかの活動に属している。実績から権威も生じ、老人の生活の質の向上をはかる実態調査なども自主的に行って、国や自治体に提言を行っている。

病弱老人施設、デイ・ケアや在宅看護ヘルパー数が不足しているといっていたが、日本とはケタ違いの対応でうらやましい。

痴呆老人はこの国でも問題になりだし、現在 G.P.(家庭医)に老人痴呆の重症化予防も含め精神医学の再教育をはじめた。

国民の N.H.S. に対する要望の中で最近ではソーシャルワーカーの充足をやかましくいっている。病院やセンターにおけるソーシャルワーカーの活動実績から大きく認識されたものだそうで、従来の N.H.S. の地区活動のよ

うに母子中心の保健指導でなく、精神障害、薬物・アルコール中毒、小児虐待、老人痴呆などの社会病理的疾患への迅速かつ適切なサービスを求める方向にウエイトがうつってきている。

これら疾患への対応は日本でも同じこと。英国民は彼等の社会的孤立、身体的精神的機能低下防止、それらの発生子予防、早期発見への活動を求めており、それに対してソーシャルワーカーの果す役割への期待が非常に大きいとのことであった。

ロンドンのハマスミス病院を訪問した折に、経営管理者の Mr. ジョン・ハバードは「G. P. から送られてくる患者が毎日いっぱい、これほど忙しく皆働いているのに赤字赤字の毎日である。近代医学のハイテクノロジーや薬剤のコスト高のため、建物維持や高度設備予算がない」と訴えていた。医学部長の Dr. デビット・ローが「我々はもっと患者に人間らしいケアをしなければならぬのだ……」とつぶやくように苦しうに言われた言葉の意味がとても大切なことと思えてならない。

生 活 環 境

かつての七つの海の王者、紳士淑女とエチケットの国にふさわしく、生活環境はよく整備されている。国が豊かな時に早くから道路網は全国100%舗装され、下水道も普及し、郊外への住宅政策も計画を重視して行っている。現在半数以上がマイホームとなった。

部屋数がわかる特徴的煙突は、車窓の風物詩にはなっているが、もう使われていないし、新しい家にはない。大気汚染防止のためセントラルヒーティングになり、石炭ストーブはもはやなくなってしまったのである。

ロンドンで、地域の第一線機関として公衆衛生活動を担当しているイーリング区役所環境衛生部を訪問した。食品、環境、公害、薬、産業衛生、労働保健などをスライドをつかつ

で熱心に説明してくれた。日本にないものとしては、環境衛生の仕事の中での住宅衛生である。うらやましかった。

1957年、住宅法 Housing Act が制定され、老朽化した借家の住民とか老人、障害者のような社会的弱者に対し、住む環境を整備して衛生を守ったのである。そこから発展し在宅老人対策上もいろいろ住環境の援助がもうけられている。

主なものとして

① 集合住宅の家主へ改善指導

- 老朽化した住宅の安全を保障
- 防火設備と暖房設備
- トイレ、バス、洗面所の数と居住人数割合

② 改造費の援助

- 湿気対策費
- 1919年以前の家の修理費
- 給湯、暖房設備費
- 少数家族の個人住宅をアパートへの改造費（住宅難対策）
- 集合生活者の衛生的設備費
- 老人のための手すり、照明等安全設備費

③ 放置荒地を公園化させるスーパーバイザー（スラム化予防）

などである。

住宅は人間の生活に密着した環境であり、公衆衛生の中でやるべきでありながら「うさぎ小屋」の日本ではできていない。

緑化対策も非常に大切にしている。ロンドンのまちのど真中にあるハイドパークは5kmにおよぶ緑の散歩道を持ち、野鳥の保護区に指定されている。ベンチに憩う老人と小鳥の語らい、静かに読書にふける人、広大な芝生のむこうでは乗馬をたのしむ人など、1.5km²の広さの並木、森林、芝生を市民の最大の憩いの場所として提供している。また、北東隅にスピーカーズ・コーナーがもうけられており、人が聞こうと聞くまいと私設弁士がしゃべり

まくり、野次も盛んで、欲求不満やノイローゼ解消法になっているそうである。

長い歴史の中で築いた緑の生活環境を失わない努力をしている。ちなみに日本の公園面積1人当り5㎡、ロンドン市民1人当り30㎡である。

「老い」と「色け」

6月22日成田を出発し14時間後に、コペンハーゲン・カストラップ空港へついたのは現地時間午前7時10分であった。ここからデュッセルドルフを経由してロンドンへ向うためしばらく地面を歩けることになった。

さすが北欧、老人国。早朝の空港はツアーにでかける老人団体客でにぎわっていた。歩く姿を見ると年齢がうかがわれるのは仕方ないとしても、腰かけて楽しそうに話しているところは我々よりずっと若い。ヘアースタイル（後の方のないところも実に上手にアレンジしている）、ブレスレット、イヤリング、ペンダントなどから靴の先まで、全く細かく神経を使って最高のセンスを発揮した熟女ばかり。日本の熟女達は、寝不足もあってなんともみじめな気分でデュッセルドルフへ向ったのである。

ロンドン・ヒースロー空港へ午後1時30分到着、迎えの専用バスでそのままケンブリッジの宿泊先、ホテル・ユニバーシティ・アームスに向った。車窓から見えるのは緑の広い広い平野ばかりで山がない。英国は地震がないから、家はレンガづくりで緑とよくにあう。ケンブリッジは町中が大学で、カレッジ数も21、学生6,000人とか。ホテルの横も広い広い緑のグラウンドであった。ひと休みしているうちに雨もあがり大学へ出かけた。校内を流れるケム川には水鳥が群遊し、牧場のように広い芝生をとりかこんで、僧院のような学舎やチャペルがならび、菩提樹、柳の大木やかわいい花壇は小雨に一段とイキイキしていた。

若者の庭と思っていた私の前に、横の建物

から美しい装いの老婦人が出てきた。彼女はたちどまり、空を見上げ、お供の人にバックを持たせるとサラリとコートをぬいだ。ヘルパーらしき人はそれを持とうとしたが、彼女は自分の腕にフワッとかけて、バックをとると小またに歩きだした。身についたエチケット



ケンブリッジ大学構内

とはいうものの、さりげなく計算された「美」にみとれ、無作法にも無断でシャッターをきってしまった。積極的に明日を創造し、「色」を上手に使いこなしアレンジしながら明るく「古い」の日々をたのしんで過している。一つ一つのアクセサリーのもつエピソードは、1日の時をまたたく間にすごさせてしまうだろう。「古い」なればこそその楽しみである。

あちこちのベンチにも老人の姿がみられ、学校のための別天地は同時に老人にとっても安全な憩いの場であった。

ウインブルドンのテニスでわきかえっていたロンドンの表通りとはうってかわって、裏町はひっそりしていた。赤いコートにしゃれたお帽子的老婦人がステッキ傘を脇に抱いてゆうゆうと横切って行った。

(次回はスイスを予定)

堀井先生は、(財)日本公衆衛生協会主催の昭和60年度欧州公衆衛生事情視察に参加されました。

先生は、「鉄火オバさん」の異名をもつ名物所長で、公衆衛生にかける情熱と信念、人の「生」をみつめるきびしくそしてあたたかい目は府衛生部内のみならず、先生を知る人全ての胸を打つものがあります。

この随筆は、先生がその時の体験を、「ヨーロッパの老い—スーパーマーケットの虫眼鏡—」と題して自費出版されたものから、転記させていただきました。(よ)